群教セ	G05 － 03
	平24.246集

思いや意図をもって表現する力を育てる音楽科指導の工夫

── 指導の手引き「音楽づくりハンドブック」の作成と活用を通して ──

長期研修員　　過外　美里

《研究の概要》

本研究は、指導の手引き「音楽づくりハンドブック」を作成・活用し、音楽づくりで思いや意図をもって表現できる力を育てることを目指したものである。具体的には、「活動の12ステップ」で音楽づくりの段階的な指導の道筋を、「常時活動」で感性や表現の技能を高めるための継続的な活動を、「音楽のもと」で感受と表現をつなげられる適切な指導をそれぞれ提案し、音楽づくりの指導の工夫の有効性を授業実践を通して検証した。

キーワード　【音楽－小　音楽づくり　思いや意図　音楽づくりハンドブック】

Ⅰ　主題設定の理由

小学校学習指導要領音楽編では、改善の基本方針の中で音楽のよさや楽しさを感じると共に思いや意図をもって表現したり聴いたりする力を育成することなどを重視している。平成24年度群馬県学校教育の指針では、「音楽的な感受の学習を基に、思考・判断し表現する一連の過程を大切にした授業づくりに努め、思いや意図をもって表現したり味わって聴いたりできるようにすること」が求められ、学習過程の価値を重要視している。協力校の子どもからは、感受したことをなかなか表現の工夫に生かすことができない様子が見られ、感受したことと表現とのつながりに課題を感じている。また、表現の工夫を考えたり、表現の方法を判断したりすることも課題である。これらの課題は、子どもが主体的に思いや意図をもって表現する活動を深めることで解決できるのではないかと考えた。

音楽づくりは、自分なりに価値のある音や音楽をつくり上げる活動である。そして、音楽的な感受から思いをもち、作品をつくり上げる過程で試行錯誤しながら意図を膨らませることで、感受したことを表現につなげることができ、思いや意図をもって表現する力を育てるために適切な領域であると考えられる。その反面、作品を仕上げるまでに子どもが活動の手順を悩んだり、活動の内容が多かったりと、指導上の課題があることも否めない。そこで、音楽づくりで思いや意図をもって表現する力を育てるために、指導の手引き「音楽づくりハンドブック」を作成して「常時活動」「活動の12ステップ」「音楽のもと」を提示し、指導内容や指導上の留意点を明らかにしたいと考えた。

以上のように、指導の手引き「音楽づくりハンドブック」を作成・活用していくことで、思いや意図をもって表現する力が育てられると考え、本主題を設定した。

Ⅱ　研究のねらい

音楽づくりにおいて、思いや意図をもって表現する力を育てるために、感受したことを表現につなげようとする指導内容や指導上の留意点を示した指導の手引き「音楽づくりハンドブック」を作成し、活用することの有効性を明らかにする。

Ⅲ　研究の見通し

音楽づくりにおいて、感受したことを表現につなげようとする指導内容や指導上の留意点を示した指導の手引き「音楽づくりハンドブック」を作成し、活用することによって、思いや意図をもって表現する力を育てることができるだろう。

Ⅳ　研究の内容

１　思いや意図をもって表現する力について

小学校音楽科の学習において、豊かな情操を養い、生活に生かそうとする態度を育てるためには、子どもが思いをもつことが大切である。思いとは、音や音楽を聴いて感受したことから「こう表現したい」と、わき起こる気持ちであり、自分なりに音楽のよさや面白さ、美しさなどを聴き取ることから生まれる。次に、子どもが思いをよりよく表現しようと工夫したり、その見通しをもって表現しようとしたりして生まれるのが意図である。このように、本研究では「感受したことを見通しをもって表現しようとする力」を思いや意図をもって表現する力ととらえた。

この力は、関心・意欲と音楽を感受するための感性、表現する技能がスパイラルに絡み合って高められるものである。関心・意欲は、音楽に対する好奇心から生まれ、友達とのかかわり合いによって深まっていく。感性は、発達に併せた音や音楽を聴く活動や体を動かす活動で培われ、思いや意図という形に変化していく。そして、表現の技能を高めながら学習過程に併せて適切な指導・支援を行うことによって、図１のア～オのように子どもが変容し、思いや意図をもって表現する力が育つと考えた。

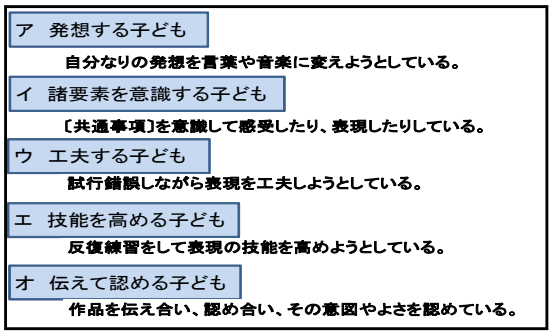

図１　思いや意図をもって表現する力が育つまでの子どもの姿

音楽づくりでも、指導者が適切に指導・支援を行うことで、子どもが図１のように、変容すると考えられる。そして、作品をつくり上げる過程に沿って感受したことから思いや意図をもち、主体的に見通しをもって表現しようとする力が育つと考えた。

２　教材の概要

音楽づくりは、小学校６年間で即興的に表現する能力と音を音楽に構成する能力を育てることをねらいとしている。そのねらいを達成するためには、６年間を系統付けると共に発達段階に応じて指導・支援することが必要である。そこで、指導の手引き「音楽づくりハンドブック」を作成して、指導者が指導・支援をするために役立てたいと考えた。「音楽づくりハンドブック」では、「常時活動」「活動の12ステップ」「音楽のもと」を中心的な内容として位置付け、その他題材例や学習系統表などを提示することで、指導者が適切に指導・支援できるように工夫した。

(1)　「常時活動」について

「常時活動」とは、授業の導入などの時間を使って５～10分で行う慣らし練習である。音楽づくりで必要な、表現するための技能は、低学年からの積み重ねで身に付けていくものであり、意欲を高めながら楽しい活動の中で培うことが効果的と考える。そのために、図２のように「みんなでできる」「楽しくできる」「みんなができる」活動を取り入れるようにした。具体的には活動例の中で活動のねらいや内容などを示し、活動の楽しさだけでなく、〔共通事項〕を意識できるような活動から表現する面白さを味わえるようにする。また、この活動を反復練習することで、音楽づくりに必要な、感性や表現の技能が育っていくと考える。さらに、友達とかかわりながら活動することで、学び合いながら活動を深めることができると考えた。

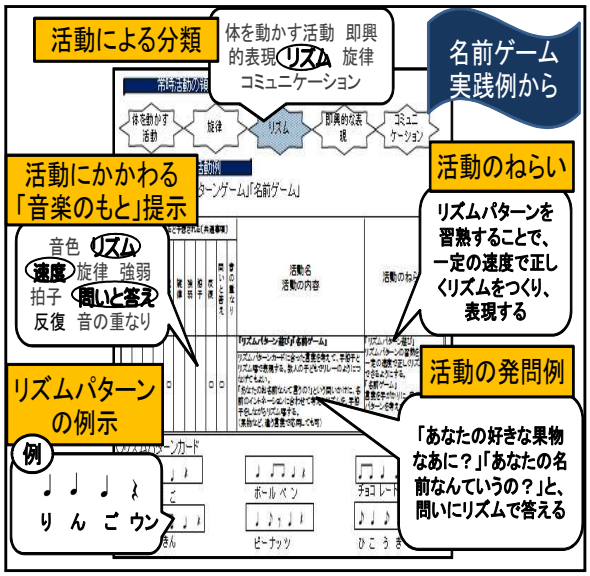

図２　「音楽づくりハンドブック」常時活動例

(2) 「活動の12ステップ」について

「活動の12ステップ」とは、子どもが表現の方法を主体的に探求できるように、三つの学習過程に併せて段階的な12ステップを提示したものである。最初の「感じる」過程は、感受したことから思いをもち、まず音に表現してみる段階、続いて「つなげる」過程は、意図をもって表現の工夫を試行錯誤する段階、そして「深める」過程は、作品を伝えて友達と認め合い、活動の価値を再認識する段階である。

表１「活動の12ステップ」

過程	学習過程での活動 ※ □は、キーワード	
感じる	①感受	音楽を感受して意欲をもって聴く。
	②発想	題材の特性を探って、発想力を広げる。
	③即興	即興的に表現する。
	④聴き合い	少人数で思いを共有するために聴き合う。
つなげる	⑤構成	曲を構成する。
	⑥試行錯誤	グループで主体的に試行錯誤する。
	⑦意見交流	作品について意見交流をする。
	⑧言葉	つくった意図を言葉で伝え合う。
深める	⑨習熟	反復練習をして作品のよさを実感する。
	⑩伝え合い	作品を通して友達と伝え合う。
	⑪認め合い	お互いの活動を聴き合い、認め合う。
	⑫振り返り	学習過程を通した活動を振り返る。

これらの三つの学習過程を、感受したことから思いや意図をもち、表現していくまでの過程の「活動の12ステップ」に細分化することで（表１）、音楽づくりで感受から表現へつなげる学習の流れが明確となる。また、ステップごとに友達とのかかわり合いを通して主体的に学習を進められるようにすることで、互いの思いや意図を、比較・判断して活動を深めていくことができる。さらに、指導者は「活動の12ステップ」を入れ替えて提示するなど、題材に併せて活用することも期待できると考えた。

(3) 「音楽のもと」について

「音楽のもと」とは、適切に指導できるように計画立案するための指導の観点である。音楽づくりでは、子どもが見通しをもって音楽づくりをするために、指導の道筋を明確にする観点が必要である。そこで、学習指導要領に明記されている〔共通事項〕を子どもに分かりやすい言葉でまとめた「音楽のもと」で提示し、作品をつくるために、提示する順序や発問例を提案することで、適切な指導・支援ができると考えた。そして、子どもにとっては、活動の観点として「音楽のもと」が与えられることで、見通しをもって作品を仕上げていくことができ、感受したことを表現につなげることができると考える。

(4) 「常時活動」「活動の12ステップ」「音楽のもと」の関連性について

「活動の12ステップ」による学習過程を効果的に指導するために、感性と表現の技能を育てる「常時活動」と指導の観点「音楽のもと」は、図３のように、関連性を示すことができる。

具体的には、まず「常時活動」で、低学年から６年間を見通して「音楽のもと」を手がかりにした継続性をふまえた指導ができるようにする。子どもたちが楽しく意欲的になっている場面が、「音楽のもと」を継続的に意識したり、表現したりする場面ともなる。ここで「音楽のもと」に基づいた発問をすれば、感受したことを言葉で表現することを通して、その感覚を言葉で認知できるようになっていくと思われる。

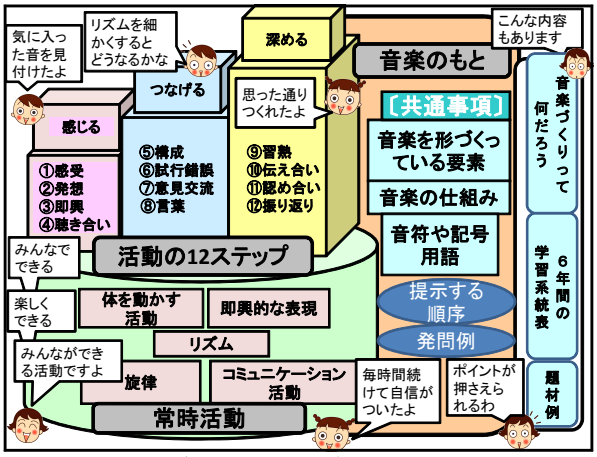

図３ 「音楽づくりハンドブック」の内容と関連性

次に「活動の12ステップ」で「感じる」「つなげる」「深める」の三つの過程に沿って12ステップによる活動をしていけば、感受したことを表現につなげる学習の流れが明確となる。そこへ「音楽のもと」の指導の観点を示すことで、指導計画作成の段階から指導者は適切な指導が考えられるようになり、子どもは見通しをもって活動できると考える。作品をつくり上げる過程では、この12ステップの段階を踏んで思いや意図をもつようになる。例えば、音の雰囲気を感じ取る①感受のステップで「音は高いか、低いか」と「音楽のもと」を活用した発問をすると、子どもは対象の音を漠然と聴いて感想を述べるだけでなく、具体的な音の特徴を知覚することができると考える。「常時活動」で「音楽のもと」を手がかりにした習熟の積み重ねによって育った感性と表現の技能を基

盤に、「活動の12ステップ」を活用した指導・支援をすることで感受したことから見通しをもって表現できる子どもに変容していくと考える。

以上のように「音楽づくりハンドブック」は、「常時活動」「活動の12ステップ」「音楽のもと」が関連し合って、思いや意図をもって表現する力を育てるために活用できると考える。本研究の研究構想図を図４に示した。

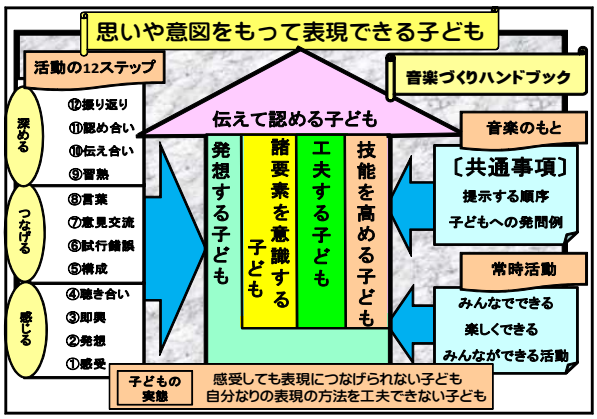

図４　研究構想図

Ⅴ　研究の計画と方法

指導内容が多様化してくる第２学年の５ヶ月間で発達段階に併せた「常時活動」の提案と、和楽器など多様な表現活動をしている第６学年で「活動の12ステップ」を検証する授業実践を行う。その際「音楽のもと」を両実践の指導の中で、どのように取り入れると有効であるかについても併せて検証する。検証は、「思いや意図をもって表現する力が育つまでの子どもの姿」（２頁図１）を観点として教師の見取りによって行う。

１　実践計画〔1〕

対　象	研究協力校　小学校第２学年　21名
期　間	平成24年６月～10月
活動名	常時活動「名前ゲーム　あるキング　手遊び歌　三時のおやつ」　他

(1)　活動の目標及び評価規準

①　活動の目標

授業の導入において、速度・強弱・拍子・音色に着目しながら、楽しく常時活動に親しみ、授業の主活動のための慣らし練習をする。

②　活動の評価規準

音楽への 関心・意欲・態度	音楽表現の創意工夫	音楽表現の技能
楽しく常時活動に親しみ、授業の主活動への意欲をもったり、見通しをもったりしている。	速度・強弱・拍子・音色の変化に気付き、その違いや根拠を考えて表現を工夫している。	速度・強弱・拍子・音色の変化に気付き、その変化に応じた表現をしている。

(2)　常時活動の指導計画　（注釈　太字は、音楽づくりハンドブック内容）

時期	学習活動	研究の手だて
6月	**常時活動**　**「あるキング」手遊び歌** ○速度・強弱などを変化させる音楽に合わせて、音楽室を歩く。 ○音楽が停止したところで、「おちゃらかほい」「餅つきゲーム」などを楽しむ。	○曲を聴いて速度・拍を合わせることを意識できるように、予告なく曲を止めて「□人組をつくろう」と指示を出す。 ○速度・強弱などを変化させて弾き、表現の工夫をするようにする。 ○グループで手遊び歌をする時は、子どもが手をつないだり、視線を合わせたり、コミュニケーションがうまく取れるように心がける。 **＜音楽のもと＞　速度・強弱・拍子**
7月	**常時活動**　**「三時のおやつ」** ○リーダーと違うゼスチャーができた子どもの勝ちとする。 **常時活動**　**「名前ゲーム」** ○自分の名前の発音を基にリズムを考えて手拍子で打つ。	○ゼスチャーをしたり、かけ声のタイミングを合わせたりするために、打楽器などで拍子を提示してもよい。 ○かけ声に「タンタンタンタン」とリズムを示し、リズム打ちをするきっかけがつかめるようにする。 ○指導者のかけ声に続いて、自分の名前に合うリズムを付けて答えられるようにして、発表した以外の子どもも続けられるようにする。 **＜音楽のもと＞　リズム・拍子・速度**
9月	**常時活動**　**「三時のおやつ」「あるキング」手遊び歌**	○速度や使用する打楽器を変えて、曲想の変化を感じられるようにする。 **＜音楽のもと＞　リズム・拍子・速度・強弱**
10月	**常時活動**　**リズムリレー** ○リズムを手拍子して、模倣しながらリレーをしていく。 ○前の人とリズムや打ち方を変える。 **参考題材　「紙で虫とおしゃべりをしよう」**	○４拍目を休符にして次の子どもが入りやすいようにしておく。 ○リズムを模倣して伝達したり、打ち方に変化を付けたりと、多様な表現の工夫ができるようにする。 ○打ち方の変化について着目できたり、前の順番の人と同じ速度でつなげていく大切さに気付けたりするための発問をする。 **＜音楽のもと＞　リズム・速度・音色**

2　実践計画〔2〕

対　象	研究協力校　小学校第６学年　57名
期　間	平成24年10月３日～11月７日　６時間
題材名	「箏で鎌倉のマイテーマをつくろう」

(1)　題材の目標及び評価規準

①　題材の目標

箏の特性を味わったり、探求したりする活動を通して、それぞれの思いや意図を表現に生かしながら、箏で鎌倉のマイテーマをつくる。

②　題材の評価規準

音楽への関心・意欲・態度	音楽表現の創意工夫	音楽表現の技能
①箏の多様な奏法に気付き、それを生かして鎌倉のマイテーマをつくる活動に主体的に取り組もうとしている。 ②作品をつくり上げる過程で、グループで試行錯誤や意見交流をしながら、作品をつくろうとしている。 ③作品をつくる活動のよさを振り返りながら、作品や言葉で発表したり、聴いたりしている。	①箏の音色をとらえて、思いや意図をもって、効果音をつくるために自分なりの奏法を工夫している。 ②リズム、速度、強弱に着目して、よりよい旋律ができるように、自分の思いや意図を生かして表現の工夫をしている。 ③反復、変化に着目しながら、旋律をどうつくるかについて、思いや意図をもって表現を工夫している。	①多様な奏法を探りながらテーマに即した効果音をつくっている。 ②音楽の仕組みを生かし、見通しをもって旋律をつくり、グループ演奏をしている。

(2)　題材の指導計画（注釈　太字は音楽づくりハンドブック内容、【　】は活動の12ステップの略）

過程		学習活動	研究上の手だて
感じる	1	**常時活動 旋律リレー** ○箏の曲を鑑賞して音色の特性をつかむ。 ○マイテーマにする題材を考える。	○即興的な旋律を発想することに慣れるために、リコーダーで５音の組み合わせのリレーができるようにする。 ○箏の多様な奏法や音色を感受するために、箏の叙情的な曲を鑑賞をする。 **【活動】　①感受　②発想** ○箏の音色から鎌倉のマイテーマの旋律を発想するために、鎌倉の景色の写真やビデオを提示してグループで共通テーマを考えられるようにする。 **【活動】　②発想　＜音楽のもと＞　強弱　音色　速度　旋律など**
	2	**常時活動 同音リレー** ○箏の音色を探り、様々な特徴ある効果音をつくる。 ○箏を使って即興的な音をつくって友達と聴き合う。	○いろいろな奏法を発想するために、箏の奏法の復習をして拍子に合わせた同音リレーができるようにする。 ○主体的に効果音づくりをするために、箏の扱い方の注意事項を確認できるようにする。　**【活動】　②発想　③即興** ○共通テーマから思いを深めるために、箏の自分なりの奏法を探りながら音づくりができるようにする。　**【活動】　②発想　③即興　④聴き合い** ○自分なりの奏法による多様な音色を聴き合えるように、参考になる子どもの気付きを、指導者が紹介する。 **【活動】　②発想　④聴き合い　＜音楽のもと＞　強弱　速度　音色など**
つなげる	3	**常時活動 七五三リレー** ○箏で「鎌倉のマイテーマ」の旋律を各々が２小節ずつつくる。	○箏で旋律を構成する慣らし練習として、三・五・七弦を使って旋律リレーができるようにする。 ○主体的に旋律づくりができるように、「音楽のもと」を使って手順を示す。 **【活動】　⑤構成　⑥試行錯誤** ○音楽づくりに集中できるように、つくった旋律は、曲構成図に提示して練習しやすいようにする。　**＜音楽のもと＞　音階　拍子 旋律など**
	4	**常時活動 七五三リレー** ○グループの作品をつくり上げる。 ○曲想を工夫する。	○箏に慣れて、演奏表現を多様に工夫するために、三・五・七弦を使って旋律リレーができるようにする。 ○グループの作品としてまとめるために、各自の旋律をあらすじに沿ってつなげられるようにする。　**【活動】　⑥試行錯誤　⑦意見交流　⑧言葉** ○思いや意図を広げるために、つなげる順番や強弱、速度、リズム、効果音を入れる場所などをグループで試行錯誤できるようにする。 **【活動】　⑥試行錯誤　⑦意見交流　⑨習熟　⑪認め合い** **＜音楽のもと＞　音階　拍子 旋律　強弱　音の重なりなど**
深める	5	**常時活動 七五三リレー** ○それぞれのグループの作品を発表して聴き合う。	○箏に慣れてマイテーマを伝え合うために、リズムを工夫して三・五・七弦を使って旋律リレーができるようにする。 ○作品への思いが伝わるように、「音楽のもと」を根拠とした発表ができるようにする。 ○グループの解説を参考に、その意図やよさを感じ取れるようにする。 **【活動】　⑩伝え合い　⑧言葉** **＜音楽のもと＞ 強弱　音色　速度 リズム　旋律**
	6	**常時活動 七五三リレー** ○音楽づくりの活動を振り返る。	○箏のいろいろな旋律を味わうために、三・五・七弦を使って旋律リレーをする。 ○学習を振り返るために、ビデオ視聴などから発表する立場と聴く立場からよりよい表現の工夫を考えられるようにする。**【活動】　⑪認め合い　⑫振り返り** **＜音楽のもと＞　強弱　音色　速度　拍子 リズム　旋律など**

Ⅵ　研究の結果と考察

1　常時活動について　～実践〔1〕・〔2〕を通して～

(1)　結果

実践〔1〕では、曲想の変化や友だちを意識することをねらいとした模倣や二人組の手遊び歌を中心とした活動を行った（図５）。グループをつくることをためらっていた子どもが、少しずつ相手を見て出だしのタイミングや速度を合わせるようになっていった。続いて「あるキング」のように、全員で速度・強弱を意図的に変化させた活動では、音楽に合わせて動ける子どもが増えていった。

図５　手遊び歌「おちゃらかほい」

次の段階として、リズムや音色、強弱を工夫して即興的な表現ができるように場面設定をした。図６は、「名前ゲーム」の授業記録を図で再現したもので、基になる名前の発音からリズムを当てはめて、友達とかかわり合いながら学びが深まっていく様子を見取ることができる。

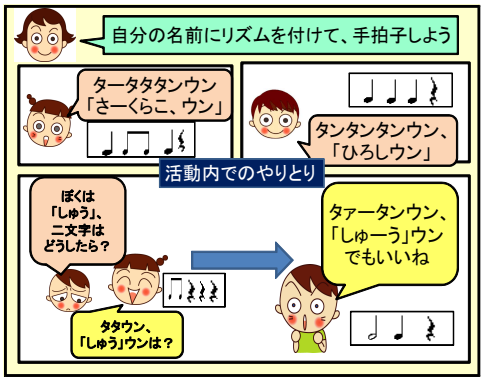

図６　「名前ゲーム」の活動の様子

「常時活動」を提案し始めて５ヶ月目に実践した「紙で虫とおしゃべりをしよう」では、生活素材の紙や打楽器で音の出し方、強弱などを観点にして音色を工夫する音楽づくりの実践を行った。その結果、虫の鳴き声を片仮名で表したり、紙でリズムや強弱を雰囲気に合わせる音づくりをしたりすることができた。

実践〔2〕の「七五三リレー」では、回を重ねるごとに休符や和音を入れる、旋律の反復をするなど「音楽のもと」を生かしながら箏の奏法が復習できた。取り組んだほとんどの子どもがすぐに活動の方法を理解し、間違っても恥ずかしがる子どもは、わずかに３人だった。

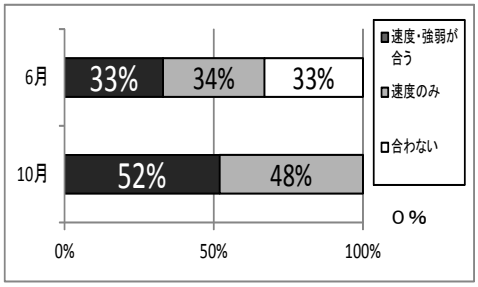

図７　曲想と表現が合わせられた割合

(2)　考察

「常時活動」で子どもがねらいを達成するために、活動のパターンを反復して習熟したことで効果を上げたと考える。また、主活動の慣らし練習としても大切な導入の活動となった。図７は、「あるキング」で速度、続いて強弱と合わせられるように留意して、拍子を示すなどの支援をした結果の子どもの変容を表している。回数を重ねるほど、速度、強弱を意識して正確に表現できるようになった子どもが増えていった。これは活動に慣れて速度や強弱を意識しながら活動できるようになった結果であると考えた。「名前ゲーム」で「音楽のもと」から観点を与えたことで、子どもは自分がもったアイデアやリズムの変化をためらうことなく言葉にしたり、音楽表現したりするようになったと考えた。また、友達に賞賛されて意欲がもてたり、友達のアイデアを参考に表現したりと学び合いの効果も見られたと考える。

図８　虫の鳴き声イメージする子どもの様子

授業実践「紙で虫とおしゃべりをしよう」で、これまで低学年は打楽器の音遊びなどで遊び感覚になってしまうことが多かったが、実践〔1〕で適切な支援をした結果、図８の子どものように、虫の鳴き声をイメージして「カサカサカサ」と片仮名で表したり、音の出し方、強弱などの変化を生かしたりするなど、音色を工夫できた。これは「常時活動」で継続的に音楽の変化に合わせた活動や、活動しながら「音楽のもと」を観点とした問いかけを行ったことで、子どもの中で曲想や音

のイメージに合った思いが生まれ、例として「鈴虫が優しく細かい音で鳴くように表現をしたい」などと子どもが「音楽のもと」を意識するように変容したと考える。

また、実践〔2〕で行った「七五三リレー」で箏の基本的な奏法の復習ができたことは、ゆったりとした雰囲気で「みんなができる」という意識が生まれ、主活動のための学習レディネスとしての効果が上がることにつながったと考える。さらに、箏で音楽づくりする主活動でも「七五三リレー」の取組を応用することができ、箏に慣れる活動としても役立っていたことが分かった。このように「常時活動」は、感性や表現の技能を育てることができ、積み重ねることで、「音楽のもと」の基となっている〔共通事項〕を感受、意識する上で有効な活動であると言える。

2 「活動の12ステップ」について ～実践〔2〕を通して～

(1) 結果

実践〔2〕は、修学旅行という大きな行事と多様な音色を探求できる箏が、子どもの好奇心を高めると考え、題材に選定した。

最初の「感じる」過程では、子どもが意欲を高め感受したことを効果音として表現できることを中心に実践した。①感受で、鎌倉の景色から感じられる雰囲気を「気持ち」「音」に絞って想像するようにすると、子どもは、表２のように友達と共有しながら景色の雰囲気を感じ取って発言していた。ここからグループで題材にする言葉を選び、片仮名で音を言語表現したり、感じた気持ちを実際に修学旅行へ出かけた後に、後日付け加えたりしていた。それと並行して、②発想で箏の叙景的な参考曲を鑑賞してから「たたく」「こする」「押す」などの自分なりの奏法を見付けて言葉で表現していた（図９）。続いて③即興として、子どもに景色で感じられる音を基にした効果音づくりを、感じたままに自由につくるように指示した。しかし、活動が進まなかったので、「音楽のもと」を使って、基になる音の特徴をつかませて自分なりのアイデアが出せるように板書し（図10）、支援した。すると、効果音をつくり出し、友達と聴き合うなど④聴き合いの活動ができた。

次に、「つなげる」過程である。⑤構成の活動で景色から感じられる気持ちを旋律につくった。最初子どもは、適当に音を並べて旋律をつくっていた。そこで、「音が高いのと低いのはどっちが気持ちに合うか」と「音楽のもと」の発問例を参考に、景色から感じる気持ちや印象をイメージできるように支援をした。すると、子どもたちは⑥試行錯誤でリズムを細かくする、２音弾いて和音の響きを入れる、休符を入れるなど、変化を付けて⑦意見交流をしながら旋律をつくっていった。そして、各自がつくった旋律を、グループでつなげて一つの曲にするために⑧言葉として「基になる音」「基になる気持ち」からつくったあらすじを参考にグループの作品を話

表２　鎌倉の景色の中で感じられる音・気持ち

	感じられる音	感じられる気持ち
まちなみ	バスが走る音 しゃべり声	にぎやか　うるさい つかれる　あつい
江ノ電	アナウンス　笛の音 しゃだんき　ブレーキの音 電車の走る音　ドアの音	楽しい　うれしい
海	風の音　波の音 とんびの鳴き声　水の音	遊びたくなる気持ち すずしい　すっきり きもちよさそう おだやか さらにわくわく
山道	虫の声　葉のゆれる音 風の音　水が流れる音	すずしい　いやされる 力強い　ひんやり 空気がいい
寺社	歩く音　すず　ジャリの音 水　パンパン（手拍子） カラスの声　鐘の音	行儀をよくしたくなる 清らか　おだやか しずか　落ち着く ひんやり

- 二・六、三・七、四・八と**和音**で音が出せるんだなあと思った。
- **リズムをきざむ**と音の雰囲気が変わる。
- 一つの音を**強くしたり弱くしたり**すると音の感じが変わる。
- 一つ一つの弦にそれぞれの音の雰囲気があって、**強く弾いたり、二つの弦をはさんで**弾いたりすると、雰囲気がまた変わる。
- 琴の**底をたたくとダジタジ**と音が出る。琴の糸を**爪でこすると、ギーギー**となる。
- **少し強めに弾く**と音が響く。弾く弦を**押すと、ビヨーンと**音が変わる。
- **二つの弦を一緒に弾くと、音が重なって**違う音が出る。

※　太字は、子どもが自分なりに見付けた奏法にかかわる部分

図９　②発想の活動で子どもが記述した「自分なりに見付けた奏法」から

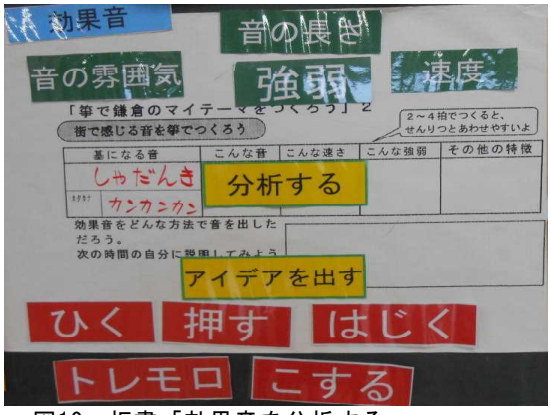

図10　板書「効果音を分析する」

し合ってつくっていった。話合いでは、曲構成図を提示して強弱や反復等の工夫がしやすいように、一つの旋律を弾く人数や弾く回数、効果音を入れる場所など、話し合った内容を書き込んでいた（図11）。グループで構成を考えるうちに、音を変更したり、旋律を増やしたりする姿も見られた(図12)。

最後の「深める」過程では、まず⑨習熟の活動として習熟しながら試行錯誤して、つくり上げた作品をグループや学級で発表して⑩伝え合いをした。発表会の後に記述した振り返りカードから互いが試行錯誤してつくった作品について⑪認め合いをしたことが読み取れ、同時に⑫振り返りとして作品をつくり上げるまでの活動について自己評価をしていた。

(2)　考察

子どもは12ステップを踏むことで、少しずつ思いや意図を知覚でき、深めていった。参考曲を聴く活動を取り入れたことで「自由に音を出していいんだ」と発想をかき立て、自分なりの奏法を探って箏の特性をつかんで思いや意図の基盤をつくることになったと考える。また、感じたままにつくる場面で活動が滞ったのは、箏の奏法と基になる音の具体的なイメージがうまく一致しなかったことが原因であると考える。そこへ、リズム・強弱・速度など「音楽のもと」を意識するようにしたことで、試行錯誤しながら自分のイメージにより近い作品をつくることができたのだと考える。また、できあがった効果音や旋律を互いに聴き合うことで、それぞれの活動を認め合い、共に学び合うこととなった。いろいろな発想を生み出して、活動を深めるきっかけとなったのが、意見を共有するために活用した曲構成図であったと考えられる（図13）。そして、各ステップで、子どもが思いや意図をもってどう変容していったかを、観察やワークシートの記述を基に分析した結果、子どもが音や音楽をどう感じ、曲をどのように構成し、どんな根拠で表現したのかなど、「音楽のもと」を意識しながら活動できるようになっていく姿を見取ることができた。

ステップが進むごとの子どもの変容は、図14でねらいを十分達成できた人数の増え方から見取ることができる。特に３～５時間目の主体的な話合いが多いときほどねらいを達成できた人数が多く、試行錯誤や意見交流をしたことで、表現の工夫ができるようになったと考える。この子どもの変容が自分の思いを音楽表現につなげる姿であると言える。また、思いを表現につなげられた人数も、ステップが進むごとに、少しずつ増加している。それは、それぞれ

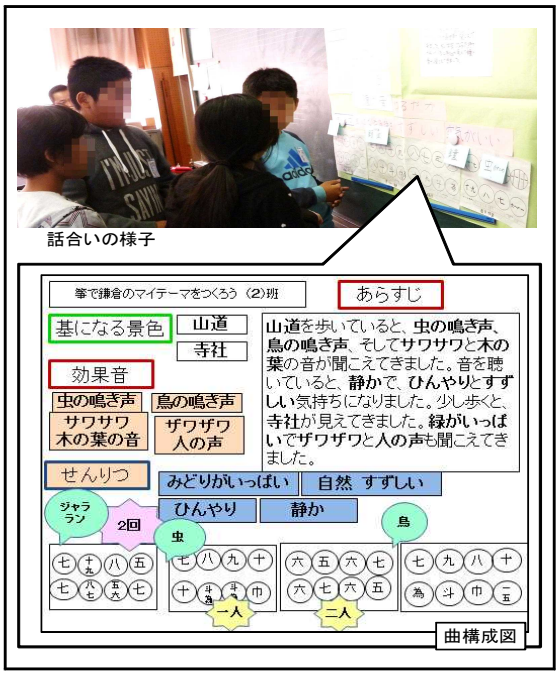

図11　曲構想図を中心に話合いの様子

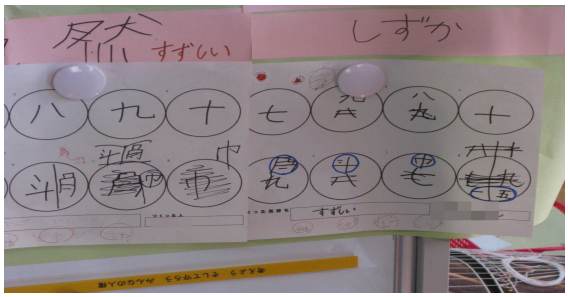

図12　個人旋律図の試行錯誤の様子

図13　弾きながらよりよい表現を探る様子

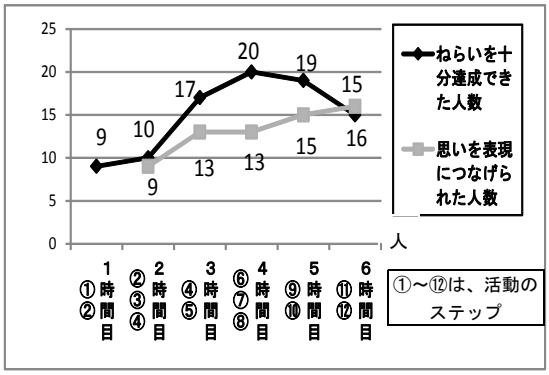

図14　各時間でのねらいを達成した子どもの人数（一クラス28人中）

のステップで適切な支援ができ、子どもが見通しをもてているからだと考える。この結果と子どもを観察した様子から「活動の12ステップ」の指導を重ねたことは、思いを表現につなげるために有効な手だてであると考えられる。なお、思いを表現につなげられた人数は、子ども自身が考えてワークシートに記述した「音楽のもと」と実際の演奏を評価・照合しながら検証・考察をした。

実践前の意識調査（図15･16）では、半分の子どもが活動に対して消極的で、試行錯誤をあまりせずにつくっていたことが分かる。その理由は主に「つくり方が分からない」であった。それが「活動の12ステップ」の過程で、発想から意欲が高まり、主体的な話合いでの意見交流や伝え合いの中で、表現の工夫ができる場面設定をしたことで、意欲や試行錯誤の数が増えていったと考える。意欲と感性そして表現の技能が絡み合う「活動の12ステップ」で、思いや意図をもって表現するまでの子どもの姿が変容し、表現する力が育ったと言える。

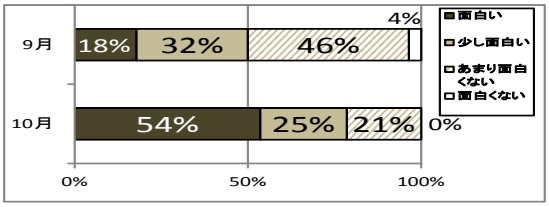

図15　音楽づくりの意欲の変容

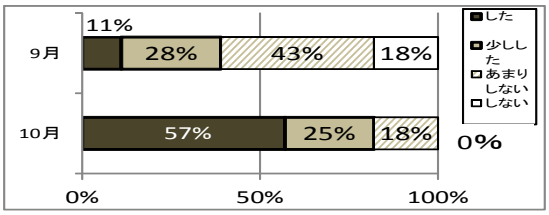

図16　作品をつくる過程での試行錯誤について

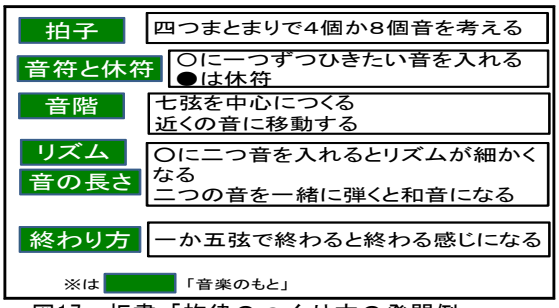

図17　板書「旋律のつくり方の発問例」

3　「音楽のもと」について　～実践〔2〕を通して～

(1)　結果

音楽づくりは、活動が多様で考えなければならない条件が多い。そこで、指導計画やワークシートを作成をする時点から「音楽のもと」を活用した。子どもに活動の手順を説明したり、作品をつくり上げるなどの感受したことを表現につなげたりする場面で「音楽のもと」を観点として指導をした。例えば、図17のように旋律づくりをする場面で、活動の手順を簡潔な言葉で説明して指示を出すために、「音楽のもと」の発問例を活用して、分かりやすく板書をするなど､主体的に旋律づくりができるようにした。

- **音のスピード**が速く正確だったのでよい。
- 演奏の**間**に入る、蝉の音がいいアイデアだと思う。
- **流れる音**に**はねる音**を加えて、よく合っていた。
- 全員が一緒に弾くと、**強弱**がはっきりする。
- **拍子**の役の子とみんなの息が合っていた。
- **拍を刻む**ように、頭でカウントを取っていた。
- 弦を**こすった効果音**が効果的だった。
- **同じ音を繰り返した**響きが印象的。
- **弦を押さえて**響きを止めていた。
- 一つ一つの**音をはじく**時、**細かく**上手にできていた。
- 音を続けて**流すように**して、波波の感じが出ていた。
- **二つの音の響き**がイメジにぴったりだった。

※　太字は、「音楽のもと」にかかわる内容

図18　「⑪認め合い」の活動時の子どもの記述」から

(2)　考察

図18は「深める」過程の相互評価の場面でのワークシートの記述である。「音楽のもと」の言葉を使い、友達と認め合っている様子から、子どもの意識の中にも「音楽のもと」が浸透していったことが分かる。これは「活動の12ステップ」を繰り返し音楽のもと」を観点として活用した結果だと考える。

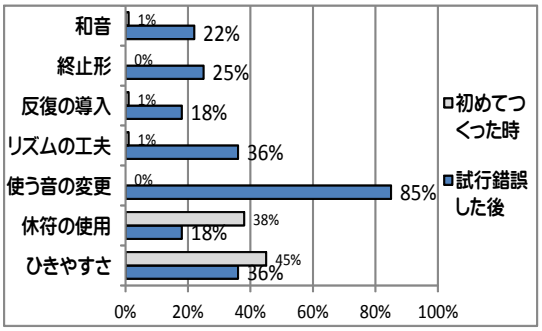

図19　旋律をつくる時に意識した「音楽のもと」

次に、図19は実践〔2〕の旋律をつくる⑥試行錯誤前後の旋律を指導者が見取ったものである。最初のうち子どもは、箏の弾きやすさや休符を入れて変化を付ける程度の、簡単な発想で旋律をつくっていた。それが「音楽のもと」による支援や話合いが進むにつれて「ひんやりの気持ちが旋律を繰り返すと強く感じる」「この音の組み合わせの方が終わった感じがする」など、様々な「音楽のもと」を意識できるようになり、試行錯誤後、85%の子どもが使う音を変更していた。また、「休符を入れると間の余韻がある」「この旋律は弾く人数を変えて強弱を付けたい」など、試行錯誤の活動時のつぶやきから見取っても、「音楽のもと」を活用して思いを具体的な言葉で表現するよ

うに活動が深まっていったことが分かる。

図20は実践〔2〕の前後で、旋律づくりの時に意識した「音楽のもと」についての調査結果である。９月は一人平均 1.6種類の「音楽のもと」を考えて旋律をつくっていたが、実践後は平均 5.4種類考えてつくるようになった。考えていた内容も比較的意識しやすい音色、速度、強弱に加えて、反復などの音の構成や和音と、多様になっている。また、話合いで出た多様なアイデアから作品をつくり上げていったのは、その場面に併せた適切な支援とグループでの意見交流などの学び合いの成果であると考えられる。

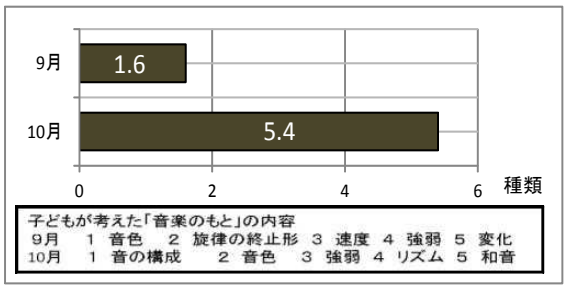

図20　一人が考えた「音楽のもと」の平均数

このように、子どもが「音楽のもと」を手がかりに、何を考えればよいのか具体的に理解できて、思いや意図をもって表現できるように変容していったと考える。「音楽のもと」による支援・指導が、子どもの内面で生まれる思いや意図を「音楽のもと」という言葉で具現化し、「活動の12ステップ」の学習過程で意識できるようにしたことで、子どもが変容していったと言える。また、「常時活動」で低学年の子どもが体を動かす活動を通して、「音楽のもと」を感じ取り、意識する姿を見取れたことからも「音楽のもと」を活用した継続的な指導が大切であると言える。

４　「常時活動」「活動の12ステップ」「音楽のもと」の関連性について

「常時活動」によって継続的に音楽活動をする基盤をつくった上で、漠然と抱いた気持ちから「音楽のもと」が思いとして形となり、直観的に表現できるようになった。そして「活動の12ステップ」の学習過程で、意図という形で見通しをもって表現できるようになった。これらの三つの内容がかかわり合うことで、子どもが音楽のよさや楽しさを感じて思いや意図をもつようになると言える。

このように「音楽づくりハンドブック」の三つの内容について関連性をもって指導・支援に活用したことが思いや意図をもって表現する力を育てるために有効であることが、本研究の検証で分かった。

Ⅶ　研究のまとめ

１　成果

○　「音楽のもと」や「活動の12ステップ」の活用で音楽づくりの指導の道筋が明らかになることで、子どもたちが音楽のよさや楽しさを感じて主体的な価値ある活動ができるようになり、思いや意図をもって表現する力を育てられることが検証できた。

○　「音楽のもと」と「常時活動」を結び付けて継続的な指導をしたことで、子どもが自分なりに音楽表現をする方法が考えられるようになり、音楽に対する感性が少しずつ育って表現活動に生かせることが検証できた。

２　課題

○　思いや意図をもって表現するために、話合い活動や感受したことを言葉で表現することが不可欠であり、他教科等とも関連させて言語活動の指導に努めていく必要がある。

○　できあがった作品を記録するための記譜と音符・休符を関連させて指導することで、〔共通事項〕の理解につながると考えられるので、それらを生かして今後も「音楽づくりハンドブック」の内容のさらなる充実を図っていく必要がある。

＜参考文献＞

・松本　恒敏、山本　文茂　著　『創造的音楽学習の試み　この音でいいかな？』　音楽之友社(1998)
・坪能　克裕、坪能　由紀子、高須　一　他著　『音楽づくりの授業アイデア集』　音楽之友社(2012)